

保育者養成と児童文学



鈴木都志子

「母親の愛情というものは……」例によって私の授業は、話はずんでくると余談になっていく。

「……宇治拾遺物語だったか、民話の中にこんな話があるんです。成長して山へ仕事に行った息子が、木の上から自分をおそおうとした鬼の手首を切り落して、難をのがれ、わが家にたどりついてみると、自分の母親が、手首を切り落とされて、ウンウンうなっていた。母親は、鬼と姿を変え、成長してわが手元から離れようとしたわが子を、とって食おうとしたのである……」

とその時、教室前方の学生が、「こんなの児童心理学じゃない」と、言ったのである。私は少なからずショックであった。思えば、私たちは、高校でも大学でも、先生が興にのって話してくれるいろいろな話を、これは教科書にのっていないとか、教科書の内容以外であるかと思っただけがなかった。

た。それどころか、授業中おもしろかったのはそんな話であり、いつまでも心にのこって、いまだに覚えておくことは、そういういわゆる余談なのである。年配の教授が、「ほくたちはもう新しい研究はできない。そのかわり、今までの自分の成果をいかして、教育に没頭する時がきた」と語ったり、「年寄りを批判し、それを否定することはやめてくれ。年寄りにとって、自分の現在を否定されることは、今まで生きてきた自分の生涯を否定されることなのだ」と述懐したりしたことが、ノートなど見返す必要もなく覚えておくことなのであり、自分が人生の難問にぶつかる時、しみじみ思い出されてありがたいと思うことなのである。学生たちも将来保育者になった時、教科書にとられない思いがけない課題に、いくらでも遭遇するのである。私も、三つの子どもに、むずかしい図鑑を持ってきて、「これ、読んで」とせがまれたこと

がある。はてと困ったが、開いたページに朝顔の花の種類が図解してあるのにヒントを得て、「朝顔の花が、一つ二つ三つ咲いていました……」と急場しのぎのお話を作ったのである。こんな時、あの授業中に、「こんなの児童心理学じゃない」と、つぶやいた学生ならどうするのであろうか。むずかしいまま、子どもの指さす箇所を読んでやるのだろうか、それとも「こんなの読むの、これ、あなたにはまだむずかしいわよ」と一蹴してしまうのであろうか。その時、その三つ近い子どもは、むずかしいのも知らず、その重い図鑑を一生懸命にかかえてきて、目を輝かせて聞き入っていたのである。

このことは、本に限らず、子どもと遊んでいるうちに、会話の中にくらでも出てくる問題なのである。丘に登って、向い側の連山の一角からたちのぼる一本のけむりを見つけて、「あ、ゆげが!!」と叫ぶ子に、「ゆげじゃない、けむりよ」と問い直すのであろうか、「かよちゃんのママ死んじやったのよ。皮はゆげになって、骨だけになったの」という話に、「ゆげじゃない、けむりよ」と笑うのであろうか。子どもの心の世界、子どものお話の世界を、もっともっと大切にしたい。そのためにも、保育にたずさわる者は、広やかに、想像の世界へ、創造の世界へ、はばたく心を持たねばならないのである。そのためには、児童文学が、大きい役割

を持っているのではなからうか。児童文学とは、児童だけが読むものではなく、子どもに接する保育者みんなが読むべきものではないだろうか。

こんなことを言いながらも、私も先日、失敗したばかりなのである。それは、山の湖のそばに建てられた、不動明王のことである。一緒に遊んでいた子どもが、「こわいじいちゃんがいるところ」と言って、よりつかなかったのが、気が変わって、一緒にその不動明王の建ってる場所へ登って行くと言いだした。機を得たり、と思っで連れて行ったのであるが、こわいじいちゃん、こわいじいちゃんと連発されて、ついに、その子にのぼらせて、不動明王が石であることを、さわらせて、教えてしまったのである。その子は、前日、自分の持っていたビスケッスを、「こわいじいちゃんにあげる」と言って、不動明王にそなえたのである。「なかなか食べないねえ」と言っていたが、遊んでいるうちに忘れてしまい、あくる日、また不動明王にのぼった時、夕べのうちにのら犬でもやってきたのか、なくなったビスケットにおどろいて、「また、こわいじいちゃんにビスケットあげよう」と言って、またビスケットをそなえたのである。そこへ私はさわらせて「ね、石でしょう」と教えてしまったのである。現代、子どもたちが妙に子どもおとなみたいに、しっかりしたことをし

やる裏に、私たち周囲の大人が、変に知的な面ばかり、ほりおこしている誤りが、あるのではないだろうか。

大人にとって、何でもないあき地が、子どもにとっては、すばらしい広っぱであるように、大人にとっては、都会の騒音に疲れた目に映るから美しいれんげ畑が、子どもにとっては、限りない遊びの広がるお花畑であり、夕暮れの紫色の薄明かりの中でも、まだじつとすわって、お花つなぎに夢中になつている世界なのであり、その経験が、美しいお花畑にとれて、空から天女がおりてきて、その七色の羽衣が花畑の上をヒラヒラと舞うというお話に、夢中に耳かたむける、こころの基になつていくのではないだろうか。そういった基礎を、子どもの経験の中に組み入れてあげたい、そして、その上に、美しいお話を、たっぷり与えてやりたい。

これらは現場の保育者には、わかりきったことかもしれない。しかし現代の学生たちに、単位さえとればという風潮があり、その風潮は保育系の学生の中にも現われてきていることを思う時、私は悲しいのである。

子どもと遊べば、大人からみると、奇想天外ともいえる出来事に遭遇する。そして、なるほど、と感心したり、その発想のおもしろさに楽しくなる。湯をわかしているヤカンのふたは、「空とぶ円盤だあー」という声とともに、サッと持っ

ていかれる。こちらは熱くなかったことに胸をなでおろす。太い針金を丸くしてできたなべすけは、たちまち車のハンドルになり、半日中それをまわしたりもどしたりしながら、「ブーブーブー」と走りまわる。そして車は、雨でスリッパならぬスリッパするのである。また、すべり台の階段のぼりつめれば、そこは、たちまち飛行機の世界になり、「行ってきまーす、バイバイ」と、その子の世界にとって一番遠い大阪にでかけることになるのである。なるほど、あのすべり台の階段と屋上のつくりは、飛行機のタラップに似ているなあと感心している間もなく、私は、「行ってらっしゃあーい」と叫んでやらねばならないのである。すると、子どもは喜々として遊園地を一周して、全く同じ道をとおって、「ただいまあ」と笑って帰ってくるのである。また、青いペンキも真新しい遊動円木にのつても、それは大好きな「赤いバス」になるし、すべり台も、四、五人でそろって、ワイイとすべりおりれば、そこは特急電車の世界なのである。

この、子どもたちのお話の世界に一緒に入っていく、さらにそこで子どもの心を伸ばすような方向で、新しいものを子どもと一緒に作っていくには、保育者が、児童心理を勉強したり、子どもに接するだけでなく、この想像的で、創造の世界、つまり児童文学に多く接することが必要なのではないだ

ろうか。それは、もっと日常の出来事としても、職業についてからは、なかなかゆつくりと時間をかけて、多くの児童文学を読むことのむずかしいことを思う時、学生時代に、できるだけお話をたくさん読んでいけば、そうすれば、たとえくわしい話は忘れても、あ、あんな話があった、あ、ここではあんな話がいい、とちょっとさがしてきて本を読んでやることが可能になるのである。

次に、現在まだ予備調査中のものであるが、ちょっとその中から少し気がついたことを述べてみよう。その調査の中では、子どもたちに、昔から語りつがれたおとぎ話を知っているか、誰にお話してもらったかたずねてみた。それから、みにくいアヒルの子とシンデレラ姫も同様にたずねてみた。緊張して答えない子どももあるので、いちがいにきめつけられないが、みにくいアヒルの子を知らないという子が多かった。なるほど、現在は、あふれる創作児童文学の中で、保育教材も、アンデルセンなどの古典は少なく、古典が子どもたちに与えられる場合でも、原作をアレンジしたものが多く、こういう昨今、保育者自身子どもとの対話の中にはぐくむお話の世界を、大切に育てることが問題であるだけでなく、保育者が、子どもたちに与えるお話を選択するということが、重要なものとなってくると思う。保育者が、どんな教材を選

んであげるか、現在ではその選択は、保育教材の製作スタッフに任せられているかもしれないが、その現状の中でも、毎日のお話のために、保育者自身が内容を選べる余裕は、まだあるといえよう。その選択がより望ましいものになるためにも、保育者の卵に、たくさんのお話を読んでもらいたいのである。

ただ、テレビの影響は、かなり保育者の手の届かないところに存在している。先のお話にしても、テレビを介してみることは多く、そこでは同様に、古典物が与えられるとしても、アレンジされている。ときには、輝く竹をわるコマーンヤルから、かぐや姫を知っているという子も出てくるだろう。私は常日ごろ、テレビの子ども向け番組をみながら、スタッフは実に子どもに興味を知っていると感心するのであるが、それが、ただ関心をひくためだけの児童理解だけに終わらないよう願うのである。先の調査で、子どもたちに、一番好きな古典と、テレビで好きな番組を比較して、どちらが好きかと問うと、全員がテレビの番組の方を好きというのである。そういう回答が出る理由には、テレビは、毎日、あるいは毎週みるという頻度の多い経緯で、印象は強められ、経緯の機会も、テレビの番組の方が、質問時に近いこともあるであろう。テレビ番組が好きという理由には、そういう要素も

入ってくるであろうが、毎日の保育の場で、昨日見たテレビの場面を再現して、喜々として保育に話し伝える姿や、園児送迎バスの中で歌う人気番組の主題歌の合唱を思い合わせる時、テレビの影響力の大きさを痛感せずにはいられない。それは何も、テレビは悪いときめつけているのではなく、たとえ大人がまゆをひそめる番組でも、子どもは無邪気に見ているので、大人がまゆをひそめるのをみて、初めてその悪い面を誇張して感じるといえる。そこで、テレビの視覚的な面でのすばらしい表現力を思う時、テレビの製作スタッフに、むしろ積極的に、もっとも子どもたちを、すこやかに、くむ姿勢になってもraitたい気がするのである。ところがそういう番組はあっても長く支えられず姿を消していくように思える。

同じ調査で、古典の中ではどれが好きかという間に、シンデレラという回答が多かった。私の批判がましい心は、シンデレラに人気があるのは、現代の一獲千金的ちかみち反応に通ずるものがあるのでは、と疑ってみるのであるが、この、各国に多く生まれ伝承されているシンデレラ説話は、それだけ子どもたちをひきつける、大きな魅力をもっているのだと考えなおしてみたのである。子どもたちは、シンデレラ姫をかばって、かぼちゃをきれいな馬車に仕立てた魔法使いのお

ばあさんに会いたいと言う。この童心を育ててやりたいと思う。たとえ成長するにつれ、形が変わっていき、もはやそんな夢は考えなくなるとしても、その童心の基本にあった、美しい心は、成長しても、ある時はやさしく、ある時は暖かく、人々に接する人間になる基になることであろう。アメリカ軍のミルクを飲み、作業がよくあつた戦後育ちの私たちでさえ、現実的で、打算的で、わがままである。それがもっと現在のように、運動場の草取りも親にさせて過保護に育っている三十年、四十年生まれの子どもたちを思う時、将来を憂う心を支えてくれるのは、子どもたちの時期に与えるお話の世界が、その子の心の柱になってくれるという信頼である。心の柱になってくれるかどうかという事実追及より、なってほしい、なってくれるのではというかすかな頼りに寄りかかった全面的願望である。それがパンドラの箱のお話にある希望というものかもしれない。

単位さえとればよいという現代の学生の風潮の中で、保育系の学生だけには、そうはなってほしくない。学生におおいに美しい童話や児童文学を、たくさん読んでもらいたいと思ふ。

(静岡県立厚生保育学院)